

| | |
|-------|---|
| 研究課題 | アカデミック・ライティング教材開発に向けた 適切な引用を促すための基礎的研究 |
| 研究代表者 | 近藤裕子 (教育開発推進センター 任期制専任講師) |

1. 研究目的

レポートや論文では、自分の文章と資料など外部の情報を明確に分けて書く必要があるが、大学初年次の多くの学生は、それが十分にできないのが現状である。近年はインターネットの普及により、以前よりも引用が容易にできるようになり、レポートや論文などで盗用や剽窃が疑われるような不適切な引用や論展開を無視したまま資料を張り付けるなどの問題が増えている。そのため、アカデミック・ライティングにおける引用方法の徹底はとりわけ重要な課題とされ、その指導は特に力を入れて行われるようになってきている。しかし、これまでの指導では、剽窃防止のための注意喚起などの倫理教育や正しい引用形式・方法の解説についてのものが中心であった。そして、それだけでは問題解決には至らず、不適切な引用はまだ多く見られる。したがって、より効果的に引用を指導するための方法および教材の開発が急務だと考える。

教材開発にあたり、どのように引用を捉え、学習者に指導すれば、正しい引用につながれるかを整理しておく必要がある。アカデミック・ライティングにおける引用について、二通(2007)は「原文の内容や筆者の意図などを正確に理解したうえで、論文の目的に合わせて引用部分を選択し、引用方法や形式、表現などを使い分けながら自分の文章に取り込んでいくという、読解から文章表現にいたる複雑な操作が必要になる」と、外からの情報を取り込む際の段階の複雑さと難しさを指摘している。ここで指摘されているように、引用を行うために踏まなければならないステップは多く、学習者の不適切な引用例も、文章構造に関わるものから表現・形式に至るまでさまざまな段階に見られる。しかし、学習者の産出物から不適切な引用例を類型化したものはなく、どのような観点からの指導が必要かはその時々に応じて現場の教師に委ねられているのが現状である。

先行研究を見てみると、これまでは矢野(2014)のように、引用の標識表現や形式から引用の妥当性や課題を論じたものが多く見られた。一方で、引用と解釈による論理展開構造に注目した研究も行われている(山本・二通 2005)。また、テーマ選定や推敲などライティングのプロセス全体に関する研究もある(大島 2007)が、そのプロセスのどの段階でどのような引用が行われているかという引用との関係は示されていない。以上のように、ある観点から引用を捉えようとしたものはいくつかあるが、実際に引用を行う際に、どのような点から引用を考え、行えばよいかを俯瞰的に示したものはなく、アカデミック・ライティングにおける引用の全体像はまだ明らかになっていない。

そこで、本研究では、前年度にこれまでの研究とは異なる観点から、特に大学初年次の日本人学生、留学生のレポート・小論文などで産出された不適切・不十分な引用を分類し、分析を行った。これらの誤用分析により、引用が形式だけでなく、文章構造の中でどのように取り入れ扱われるかにも注意を払う必要だということが明らかになった。この結果をさらに 2017 年度では、実

際の指導の中でどのように扱うべきかを検討し、外部資料を取り入れた際に書き手の解釈を加える練習や文章を論理的に展開させる練習問題を作成し、実際にそれを用いた指導を試みた。また、同時に、初年次の学生の文章表現のレディネス調査を行い、初年次の学生にはどのような指導が優先されるかを検討した。これらの取り組みを、実際の教材作成に反映させることを今後課題とする。

2. 研究方法

A:レディネス調査

(1) 調査対象

大学初年次の学習者（日本人）およそ 240 名

(2) 調査・分析方法

① 産出物の分析

800 字の小論文における主張の根拠の傾向を分析した。ここで資料の引用の傾向と、主張の根拠の客観性、小論文の構造という 3 点から、研究代表者・分担者および協力者の 3 名（日本語教育歴 20 年以上）で、分析を行った。

② アンケート調査

これまで書いた文章のタイプ、指導内容についてアンケート調査を行った。

B:パイロット教材作成および実践と検証

(1) 対象

大学初年次の学習者（日本人）およそ 240 名、留学生 40 名

(2) 調査・分析方法

論理展開を適切に行う練習問題を作成し、アカデミック・ライティング指導の際にそれを用いた指導を行った。そこでの学習者の思考プロセスを可視化し、パイロット版教材の精査と指導方法の考察を行った。

(3) 倫理的配慮

本研究は、学生個人のレポートを利用して行うものである。大正大学の倫理規定に則り、予め学生に研究や教材開発のために使用する可能性があることを断り、使用する際は、その名前部分を破棄し、個人情報も一切明らかにしていない。また名前や個人を特定されうる情報が書かれたものは使用しないことを徹底して行った。

3. 研究成果と公表

(1) 研究成果と今後の課題

本研究により、アカデミック・ライティングにおける学生の課題および指導上の課題の一端を

明らかにすることができた。A:レディネス調査の結果については、初年次の多くの学生は、大学入学以前に外部資料を用いた論の組み立てを試みたことがほぼないことが明らかになった。一方で、論の展開としては、演繹型の構成を用いる学習者が多く、この点に関してはアカデミック・ライティングのレディネスは認められることを結論づけた。さらに、主張の根拠の傾向として、非常に主観的な事柄を挙げる傾向があり、指導の際には、客観的根拠の提示を促す必要性が明らかになった。(近藤裕子・中村かおり・向井留実子「大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査」『日本語教育方法研究会誌』査読無, No.24,Vol.1, pp.102103, 2017 8)

また、パイロット版の教材に関しては、文章の展開が論理的であるかどうかの意識の確認、論理性の指導を経て、論理性の欠如している部分の修正筆などの一連の練習問題を実施した結果、この取り組みの後、学習者自身が論理の飛躍に気付けるという一定の効果が認められた。(中村かおり・近藤裕子・向井留実子「アカデミック・ライティングにおける論証技術習得の課題」『平成29年度日本語教育学会秋季大会ポスター発表予稿集』査読有,2017 7.)

この研究の成果により、作成する教材の方向性が一部定まった。今後は、初年次ライティング指導において、どのような要素を、どのように指導していくかについて具体的な案を提示し、教材化を進めたい。

(2) 公表

2017年度の研究成果の一部は、以下で公表した。

- 1) 向井留実子・中村かおり・近藤裕子「引用で求められる「解釈」をどのように指導するか—学習者の作文事例から見た引用・解釈文作成の困難点」『専門日本語教育』査読有, 19号, 2017,12
- 2) 近藤裕子「学生のレポートに見られる『引用』の問題点—スキル教育を考える教育へ—」『大正大学教育開発推進センター年報』査読無, 第2号, pp.5-8, 2017 9.
- 3) 中村かおり・近藤裕子・向井留実子「アカデミック・ライティングにおける論証技術習得の課題」『平成29年度日本語教育学会秋季大会ポスター発表予稿集』査読有,2017 7.
- 4) 近藤裕子・中村かおり・向井留実子「大学初年次のアカデミック・ライティング指導に向けたレディネス調査」『日本語教育方法研究会誌』査読無, No.24,Vol.1, pp.102103, 2017 8.
- 5) 中村かおり・近藤裕子・向井留実子「アカデミック・ライティングにおける論証技術習得を目指した指導の実践—文レベルでの論理的つながりの意識化と明文化—」『日本語教育方法研究会誌』査読無, No.24,Vol2, 2018 3

参照：2016年度の関連研究

- ①バリ日本語教育国際研究大会ポスター発表「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」(於インドネシア・バリ, 2016年9月10日)
- ②「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016年日本語教育国際

研究大会予稿集』（電子版）

③第 47 回日本語教育方法研究会 口頭発表・ポスター発表「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題」（於日本学生支援機構東京日本語教育センター，2016 年 9 月 24 日）

④「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題」『日本語教育方法研究会誌』23(1), pp.8-9

⑤第 48 回日本語教育方法研究会 口頭発表・ポスター発表「大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか」（於宮城教育大学，2017 年 3 月 18 日）

⑥「大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか」『日本語教育方法研究会誌』23(2), pp.8-9

4. 文献

石黒圭（2011）「第VI章 8 引用の種類と作法」中村明他編『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店

市古みどり（編著）（2014）『アカデミック・スキルズ資料検索入門—レポート・論文を書くために—』慶應義塾大学出版会

大島弥生（2007）「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」『言語文化と日本語教育』33号, pp57-64

佐渡島紗織・吉野亜矢子（2008）『これから研究を書くひとのためのガイドブック』ひつじ書房

二通信子（2007）「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか—アカデミック・ライティングにおける引用の学習—」『2007 年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.283-284

文化庁「著作権なるほど質問箱」<http://chosakuken.bunka.go.jp/naruhodo/>（2016.8.17 閲覧）

矢野和歌子（2014）「学部留学生の論説文における引用の課題」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』6, pp94-101

山本富美子・二通信子（2015）「論文引用・解釈構造—人文・社会科学系論文指導のための基礎的研究」『日本語教育』165号, pp.94-108

山本富美子（2016）「論文の「意図的ではない剽窃」の問題」『Global communication』6, pp.117-132